古代文字資料館発行『KOTONOHA』第 179 号(2017 年 10 月)

女真文字談義（1）

吉池孝一

東アジアの解読が必要な“文字と言語”に関心を持つ学生と教員の対話です。登場人物の設定は次のとおりです。

佐藤久美：学生。歴史一般に関心がある。
山村健一：学生。入門段階のいろいろな言葉の学習を趣味としている。
安井教授：漢文の教員。いろいろな文字に関心がある。学生とともに金朝の言葉と文字の勉強をはじめた。

〈第１回目〉

《はじめに》

・・・・・安井教授の研究室。壁に女真文字の拓本がかかっている・・・・・

安井教授：東アジアの“失われた文字”には、殷（商）の甲骨文字、遼の契丹文字、西夏の西夏文字、金の女真文字、元のパスパ文字などがあります。これまでに、甲骨文字の勉強会と契丹文字の勉強会をやりました。

山村健一：甲骨文字は「実物」の拓本を読むところまでいきました。なかなかおもしろかったです。

佐藤久美：契丹文字のほうは、挫折、でしたね。拓本にとりくんだのですが、甲骨文字を読むようにはいきませんでした。

山村健一：これまでの解読を“なぞって”みるだけでした。それでも、概略はつかめたような気がします。

安井教授：契丹文字は解読途中の文字ですから仕方ありません。概略の理解までいけば十分ではないでしょうか。

山村健一：それで、今回は何をやるのでしょうか。

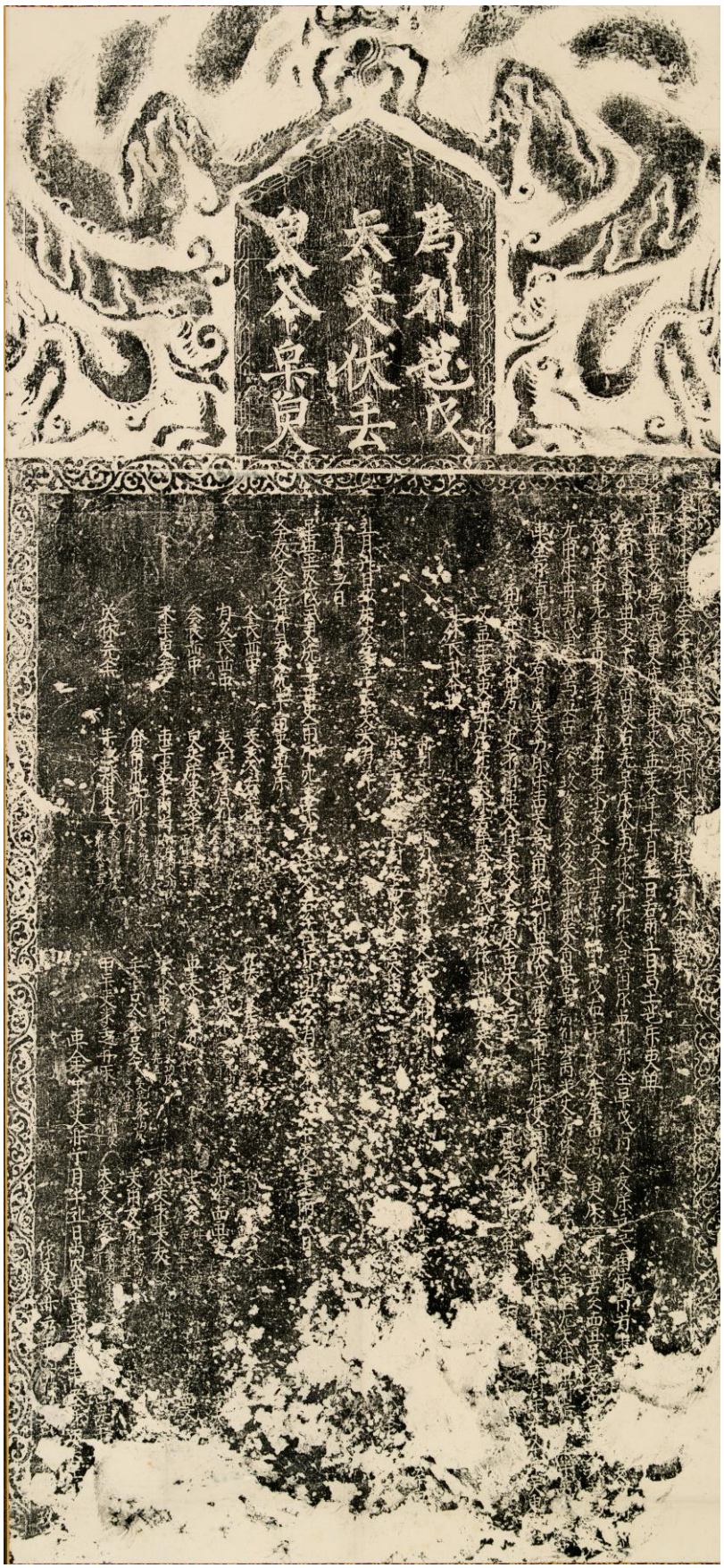
安井教授：この拓本をみてください（次頁参照）[1]。

山村健一：上に突き出た部分の中央の文字ですが、下２つは「伏」「丟」という漢字にみえます。ほかの部分も漢字に似ていますね。

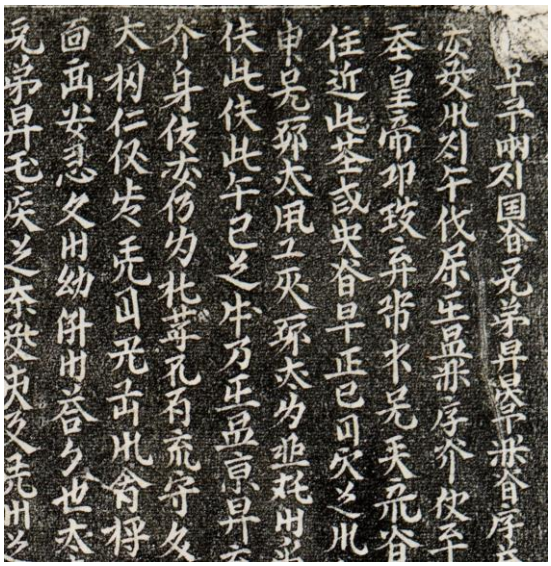
佐藤久美：契丹文字でしょうか。

山村健一：たしか契丹文字には二種類ありました。表意文字を主とした「契丹大字」と、表音文字を主とした「契丹小字」です。そのうち、契丹大字のほうに似ています。

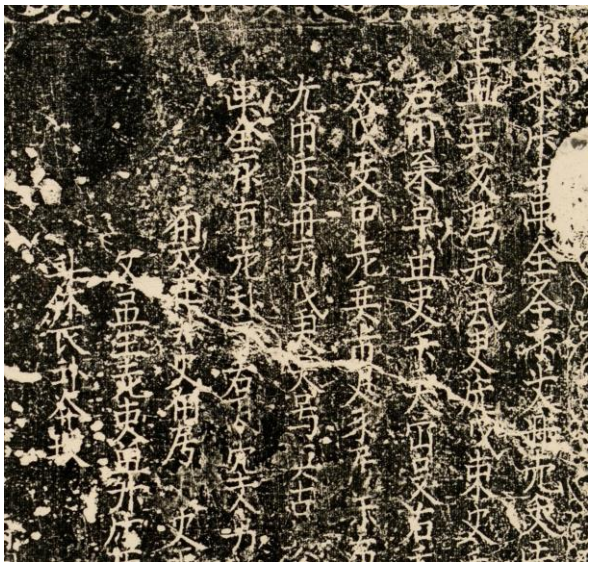
[1] 吉池孝一、中村雅之、長田礼子（2016）『遼西夏金元対音対訳資料選』愛知県：古代文字資料館による。



安井教授：契丹大字と「この碑文」をならべてみましょうか[2]。



契丹大字



この碑文

山村健一：「この碑文」には、はっきり見えない部分があるので何とも言えませんが、左の契丹大字の方が漢字に近いのではないでしょうか。佐藤さん、どうでしょう。

佐藤久美：それぞれ書かれている内容は違うでしょうから、その反映で、印象も違うのかもしれません。両方とも契丹大字だと言われても、それほど違和感はありません。やはり契丹大字でしょうか。

安井教授：じつは、女真文字なのです。契丹大字と女真文字の外形は似ている、ということを実感してもらえればいいのですが。この拓本、「女真進士題名碑」と呼ばれています。

佐藤久美：進士というと、科挙（官吏登用試験）の“進士の試験”のことですね。

安井教授：そうです。進士の試験のことが書いてあるようです。

佐藤久美：いつ頃のものでしょう。

安井教授：1224 年です。石の表面の剥落が進み、碑文の状態がかなり悪くなった時に採られたもので、拓本としては良いものではありません。

《拓本と資料》

山村健一：拓本の下の部分、白くなっていますが崩れているのでしょうか。

安井教授：石の表面がはがれ落ちて、墨がのらずに白くなっています。長年にわたって風雨などにさらされたため剥落したのでしょう。何度も拓本が採られたため、傷みが進んだという面もあるでしょう。

---

[2] 前掲の吉池孝一、中村雅之、長田礼子（2016）による。契丹大字拓本は「耶律習涅墓誌」。

山村健一：拓本を採(と)ると傷むのですか。

安井教授：拓本は、碑石(ひせき)の面に紙を置き、凹凸(おうとつ)を墨で写しとったものです。凹凸に紙をピタリと入れ込むときに“打ち込み刷子(ブラシ)”を使います。ときには木槌を使います。その後、墨を付けた“拓包(たんぽ)”で文字を打ち出します。それで傷むというわけです。拓本については、『墨　巻頭特集　見方・取り方・学び方　拓本を楽しむ』143（東京：芸術新聞社，2000 年）に採り方の写真があり参考になります。図書館で眼を通しておいてください。

佐藤久美：上に突き出た部分は完全ですね。

安井教授：上に突き出た部分は碑額(ひがく)といって、ふつう碑文(ひぶん)の題名が書かれています。下の本体の部分は碑身(ひしん)といいます。

山村健一：話はそれますが、この拓本、どのように入手(にゅうしゅ)されたのですか。

安井教授：古書店の目録に出ていたものです。本学以外の大学の図書館や研究機関にも同種の拓本が所蔵されています。わたしたちは、そのなかから、欠落がすくない拓本の写真版を利用して勉強会の資料にするということです。

山村健一：欠落の少ない初期の拓本に拠ればいい、ということですね。

安井教授：必ずしもそうではありません。高い技術で鮮明に採られた拓本（精拓(せいたく)）と、粗雑にとられた拓本（粗拓(そたく)）があります。初期の欠落が少ない拓本でも、それが粗拓(そたく)であるならば明瞭でない部分が生じてしまいます。たとえ欠落が進んだ後代の拓本であっても、それが精拓(せいたく)であるならば参考になります。

佐藤久美：現在に残っている碑文の原石と各時代に採られた拓本を見比べて研究をすすめる、ということですね。

安井教授：そのとおりです。

山村健一：読めるようになるでしょうか。

安井教授：あせらず、ゆっくり取り組みましょう。

《教科書の記述をめぐって》

山村健一：ところで、金朝(きんちょう)について、“女真文字(じょしんもじ)が作られた”ということ以外、あまり知りません。

安井教授：そうですか、そこに高校の世界史の教科書（『三省堂　世界史[B]改訂版』）があります。佐藤さん、金朝について何が書いてあるか、まとめてくれませんか。

佐藤久美：はい。・・・・・・・

遼(りょう)、西夏(せいか)、金(きん)のことについては合わせて２ページくらいの分量です。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

佐藤久美：言語や文字に関わる記述は少ないようです。

１．12 世紀にはいると，遼の支配下にあったツングース系の半猟半農の女真(じょしん)（女

直）が，遼の影響を受けて強力になり，1115 年，独立して完顔阿骨打（在位 1115～1123）が金を建てた。

2．金は宋と結んで遼を滅ぼし（1125 年），ついで華北に侵入し，宋を南方に追った（1127 年）。

3．金は，猛安・謀克という行政・軍事制度を維持しながら，遼と同様の方法で華北を支配し，政治制度では中国風の官制を採用した。

4．女真文字をつくったが，中国文化の影響が強かったので，あまり使用されなかった。

5．遼や西夏と同様に，仏教もさかんであった。

安井教授：たしかに言語や文字に関わる直接的な記述は少ないですね。しかし、どうでしょう、なんとなく背景にある言語や文字の状況を想像できるのではないでしょうか。

《ツングース語》

山村健一：教科書には「ツングース系の女真」とあります。そうしますと、言葉はツングース系に属す、ということですね。

佐藤久美：ツングース系の言語というのは、アジアのどのあたりに分布しているのでしょうか。

安井教授：以前描いた簡略な地図があります。これで、分布する地域を確認しておきましょう（次頁参照）[3]。遼の契丹語は、上段中央のモンゴル語系統の言語です。西夏の西夏語は、中央左のチベット・ビルマ語系統の言語です。問題となる金の女真語ですが、地図の右上をみてください。ツングース語とあります。この系統の言語ということになります。

佐藤久美：ツングース系というと、遼、金、元、明、清と続く王朝のうち、清を建てた満州族もツングース系であったとおもうのですが。

山村健一：金と清の支配者の言語が同じ系統だとすると、女真語と満州語が、言語学の目から見てどのような関係にあるか気になります。

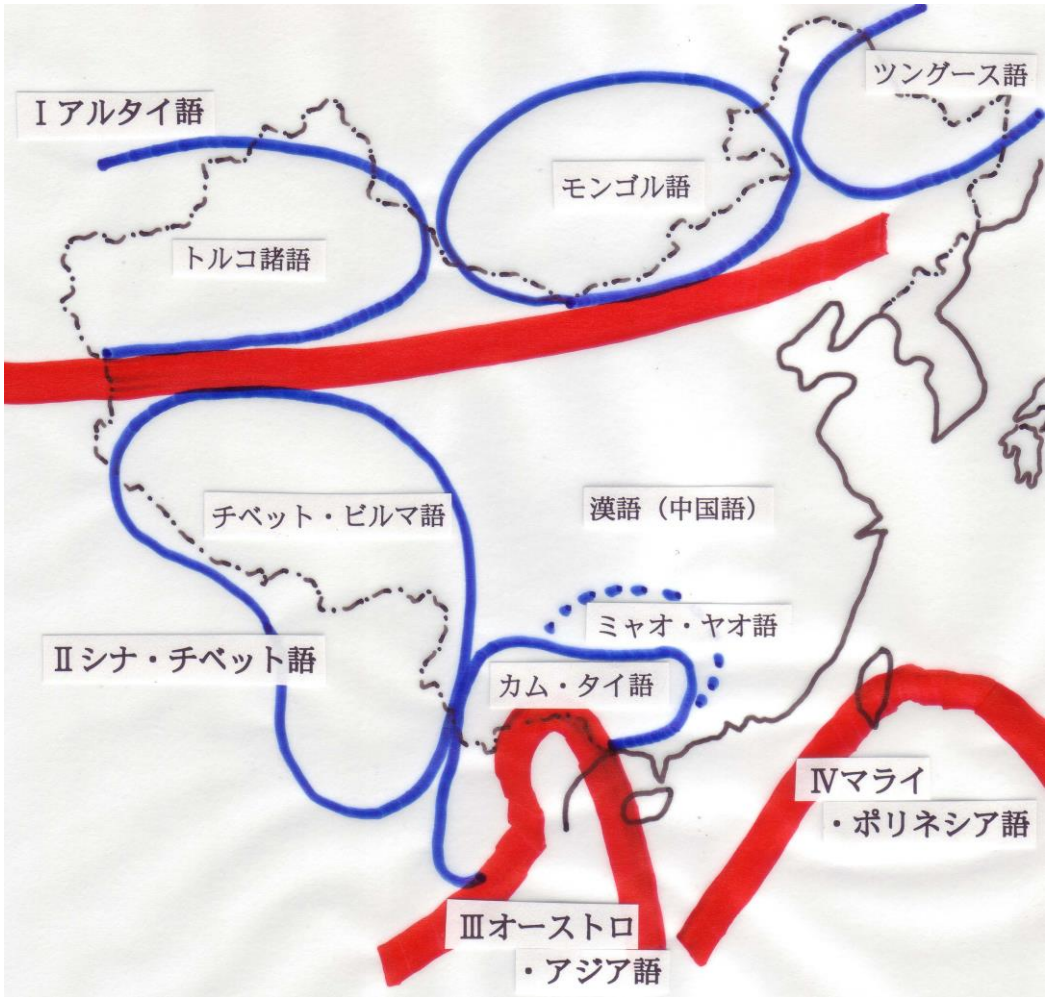
安井教授：そうですね、女真語と満州語がどのような関係にあるかということは、女真語を勉強するうえで欠かせないところでしょう。

佐藤久美：金は、遼を滅ぼして華北に侵入し、宋の支配者とその一団を南方に追ったわけです。そうしますと、華北の支配者は女真族で、非支配者は漢族ということになります。支配者の言語はツングース系の女真語で、非支配者の言語は漢語（中国語）ということです。もちろん、この二つの言語を挙げたのは、“主な言語”

[3] 李方桂著、小川環樹訳(1977)「中國における諸民族の言語と方言」『中國語學研究』275-295, 東京：創文社。中国社会科学院和澳大利亞人文科学院合編(1987)『中国語言地圖集』香港：朗文。以上の二著を参照し作図したもの。

という意味です。

安井教授：実際には、さまざまな民族がさまざまな言葉や文字を用いていたことでしょう。



山村健一：金が華北に侵入した後の言語の状況は、さきほど佐藤さんが言っていた清の状況と、うり二つですね。清朝では、支配者の言語がツングース系の満州語で、非支配者の言語は漢語（中国語）ということですから。

安井教授：現代に近い清の状況は比較的よくわかっています。金の状況がどのようであったかを推測するうえで、清の状況は参考になるでしょう。

佐藤久美：「ツングース系の女真」ということで話がすすんできましたが、そもそもツングース系の言語の特徴というのは、どのようなものでしょう。

安井教授：大事なことですね。大事なのですが、その点については、教科書をとおしての問題提起がひと段落してから、じっくりと確認することにしましょう。

　さて、今日は勉強会も初日ですから、このあたりにしましょう。次回も、先にあげた高校の教科書の記述にそって、背景にある言語や文字の状況を考えてみます。次回までにじっくりと検討しておいてください。